慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スティーヴン・ クレインの総括 : 「若者のペース」と「仰向けの顔」
Sub Title	A brief overview of Stephen Crane's achievements : "The pace of youth" and "The upturned face"
Author	久我, 俊二(Kuga, Shunji)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2016
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.137 (2016. 2) ,p.303- 330
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	エッセイ・ 翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000137-0303

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセイ・翻訳

スティーヴン・クレインの総括
――「若者のペース」と「仰向けの顔」――

久　我　俊　二

1　なぜこの二作か

当たりまえの話であるが，作家には最初と最後の作品がある。とはいえ，作家によっては，往々にして最初・最後の作品が確定できない。理屈っぽくなるが，最初は何となく書いて「自分は作家として第一作執筆中」という自覚はなく，後年，世に認められてから，「この作品が最初のもの」と発掘・認定されることがある。そうなると，その作品は作家個人にとっては習作であって，「こんなもの世に出されても不本意」という場合もあるだろう。

私が長年少しずつ勉強してきた，アメリカ 19 世紀末の自然主義作家（と文学史的には書いてあることが多い），スティーヴン・クレイン（1871−1900）において，事情はもっと複雑で，なぜなら彼はずっとジャーナリストでもあったからだ。新聞記事も無署名で並行して書いていて，彼がいつから執筆ということを始めたのか，今でも確定されていない。創作については，早世であったので，多くの未完の作品を残している。また終生金銭に困っていたので，書きなぐったものも多い。

作家の文学的生涯を総括する時，（本格的な）最初・最後の作品をどれと見るか，難しいところがある。一つの考え方であるが，作家本人にとって本望なのは，それぞれ高い評価が与えられた最初と最後の作品で検討されることではないか。

クレインは短命（28 歳逝去）であったが，多くの記事・作品を残した。ここ

では記事を省いて，小説で考えたいが，中長編では，アメリカ最初の自然主義小説といわれる『マギー：街の女』（*Maggie: A Girl of the Streets*：私家版 1893・公刊された削除版：1896）で始まる。だが，最後は執筆途中で死去し，ロバート・バーに引き継いでもらった『オラディ』（*O'Ruddy*：死後出版 1903・両者の分担の詳細は不明）である。これでは最初と最後の作品の評価は難しい。

そこでクレインの評価の高い最初と最後の短編を考察するのはどうだろうか。彼の再評価が本格的に始まった 1950 年代から評価が高く，今でも論じられるのは，最初が「若者のペース」（"The Pace of Youth"：1895）と言える[1)]。最後は，間違いなく「仰向けの顔」（"The Upturned Face"：1900）である。以下に両編の邦訳（拙訳）を掲載し[2)]，その上で，両作品に対する従来の評価を参照しながら，クレインという作家の一端を記してみたい[3)]。拙訳を掲載するのには，理由がある。クレインの場合，1950 年代の再評価の頃から，たとえば作品に宗教的象徴性を見ていく R・W・ストールマンのような解釈と，それに反対するより現実（原文？）に即した解釈があり，基本的には今日までこの対立は変わっていない[4)]。要するに，後者からは，前者の牽強付会と思える解釈は，「そんなこと，作品のどこに具体的に読み込める？」としか見えないのである。以下，作品に関する私のも含めた様々な解釈を記していくが，原文の翻訳に照らして，その妥当性を考えてもらえれば，というのが狙いである。

2 「若者のペース」

「若者のペース」は，1895 年 1 月 17 日・18 日に，配信社バチェラー，ジョンスン・アンド・バチェラー社より，全米の新聞社に分割して配信された。前年の 12 月にクレインは『赤い武勲章』（*The Red Badge of Courage*）の短縮版で一気に名前が知られるようになっていた。この「若者のペース」は「メリーゴーラウンド」（"The Merry-Go-Round"）という異なるタイトルで，1895 年の 1 月 2 日にイギリスのスケッチ誌に一括掲載されている。これは後年判明した。中身は少しだけ異なる。彼のイギリスでのデビュー作になる[5)]。

クレインがいつ「若者のペース」を書いたのかであるが，親友で画家のコー

ウィン・ナップ・リンスンによれば，1893 年の春頃，当時クレインが住んでいたニューヨーク・マンハッタンのアヴェニューA1064 番のアパートを訪れた時，執筆を目撃したそうである[6)]。リンスンのこの証言は，彼が最晩年の 1958 年というおよそ 60 年後に書いたクレイン伝に記されている。残念ながら，この伝記は総体的に事実関係に関して記憶違いもあって怪しい。クレインの執筆は 1893 年ではなく 1894 年ではなかったのかという説もある[7)]。

「若者のペース」の元になった話は，1892 年の夏に遡るようである。この時クレインは，ニュージャージー州にある海岸のリゾート地アズベリー・パーク（この作品の舞台に酷似している）で，通信局を営む兄の記事集めに協力をしていた。取材活動の中で恐らく 6 月後半に，アリス・オーガスタ（通称リリー）・ブランドン・マンローという，ニューヨーク市在住の多分 1 歳年上（1870 年生まれ？）の人妻と出会っている。前年結婚しているが，夫は地質調査関係の仕事で出張が多く，そのこともあってか早くも不仲になっていたようだ。夫妻の写真が残っているが，夫は（生年不明）かなり年上で，ただし身分はそれなりにありそうな紳士に見える。リリーの方は，かなりの美人である。こんなことを言ってはいけないのかもしれないが，以降クレインが付き合った女性たちと比較しても一番美しく見える。彼はすぐにリリーに夢中になり，彼女もその誘いに応じ，夫の知るところとなり，当然トラブルとなったようだ。後年クレインは，『マギー』の原稿をリリーに預けたことがあったが，夫が怒って破棄したとも言われる。それなら，誠にもったいない話である。

クレインはリリーにずっと未練があった。1898 年の恐らく 4 月に，彼はリリーにワシントンの議会図書館で会っている。この時クレインにはすでにイギリスに内妻コーラがいた。それなのにリリーに駆け落ちを持ちかけたようだ。クレインがイギリスからアメリカに戻って来たのは，キューバでの米西戦争の取材のためである。イギリスでは親友ジョセフ・コンラッドの助けを借りて出版社から借金し，またアメリカでも配信社と契約していて，従軍記者になるはずであった。いったい，クレインは駆け落ちしてどうするつもりだったのか。そもそもどこに逃げる予定だったのか。まさか戦場のキューバか。ありえない訳ではない。というのも内妻コーラとは，1897 年のギリシャ・トルコ紛争の

戦場で彼は行動を共にしたのだから。駆け落ちしてイギリスに舞い戻ることはなかっただろう。コーラはかつて（クレインとは別の）愛人の浮気を疑って，その愛人を刺したこともある気性の激しい女性だった。クレインがリリーと一緒に戻ったら，修羅場必至であっただろう。

などと想像を膨らませても仕方がないが，このリリーとの駆け落ちという実現できなかったことが，「若者のペース」に願望として反映されているのは疑いない。2014 年出版のクレインに関する決定的伝記『スティーヴン・クレイン：火のような人生』によれば，リリーのニューヨークの自宅にクレインは遊びに行き，文学的な話などもしていたらしい[8)]。だが，数多く交わされたはずの手紙は，4 通しか現存しておらず，「若者のペース」について，クレインがリリーに話したかどうかは不明である。可能性はないとは言えない。というのも，恋した他の女性，たとえばネリー・クラウスなどには「あなたのために作品を書いた」式のことを結構語っているので。ちなみにリリーらしき女性は，「キャプテン」（“The Captain”）という 1892 年 7 月 2 日にニューヨーク・トリビューン紙掲載の小品にも登場する。リリーに出会った直後の作品と考えられるが，老いたキャプテン（船長）が操縦するボートに乗って，遊覧する若者たちの会話で成り立っている。他愛もない会話の底には，性的な下心が見え隠れする。

ところで，「若者のペース」が，なぜクレイン最初の佳品と言われるのか，理由は 2 点に絞られるであろう。一つは 19 世紀末に大衆化されたリゾート地の様子を鮮やかに描いたこと[9)]，もう一つは，そのリゾートにあるメリーゴーラウンドを巧みに象徴的に生かしたことであろう。

イギリスでは恐らく南部のブラックプールが最初の大衆化リゾートであろうが，アメリカではニューヨーク市近郊のコニー・アイランドと並んで，隣州ニュージャージーのアズベリー・パークが，観光客の懐具合に応じて，日帰りにも，あるいは長期休暇（リリーの一家はこれに該当。クレインとは町一番の高級ホテルであるレイク・ビュー・ホテルで出会った）にも向いたパイオニア的リゾート地であった。その華やかな雰囲気，特に夜になると遊歩道に男女，家族連れが大勢行き交い，夏を満喫している様子をクレインは作品中で描いているが，一

方，そういう享楽性とは裏腹の厳格さもこのリゾートにはあった。アズベリー・パークのアズベリーとは，アメリカ・メソディストの創始者の一人フランシス・アズベリーに因んでいた。酒やタバコ，賭博だけでなく，夜間の男女の外出なども，色々制限されていた。「若者のペース」のメリーゴーラウンドの経営者スティムスンには，単なる頑固親父というだけでなく，そういうピューリタン的な（ともすれば）独善性も反映されているであろう。ちなみに，クレインの両親は，父はメソディストの牧師，母は禁酒運動の熱心な活動家であった。

まずこの作品の第一の評価，リゾート地の描写である。拙訳でどの程度クレインの鮮やかな描写を再現できているか，自信はないが，友人のリンスン――事実関係の記憶は不確かだが，彼が作品を読んだのは疑いない。多分最初の読者かつ称賛者であろう――が，画家らしく「色による情緒（の表現）」（“color emotion”）[10] と述べたように，クレインの色彩を多用した感性豊かな，印象主義的描出方法による先駆的作品と言える。実際，リゾート地は華やかであろう。そういう対象があってのクレインの描写なのか，それとも描写力でもって対象を一層煌びやかにしているのか，それは分からないが，こういう描写力が代表作『赤い武勲章』で最高度に発揮されるのである。

そして華やかな描写の中心に存在するのが，メリーゴーラウンドである。実際アズベリー・パークにはメリーゴーラウンドがあって，ニューヨーク・ジャーナル紙 1892 年 7 月 17 日付の記事「海辺の楽しみ」（“Joys of Seaside Life”）でクレイン自身が言及している。

「若者のペース」で，メリーゴーラウンドの周囲にいるのは，経営者のスティムスンに娘のリジー，恋人のフランクだけではない。当然だが観光客，つまりメリーゴーラウンドに乗ってはしゃぎ回る子供たちがいるし，それを心配そうに見守り「気をつけなさい」という親がいる。子供の羽目はずしを危惧するという点では，それを子の勝手な恋愛と置きかえれば，スティムスン・リジー親娘の関係にも通じるところがある。メリーゴーラウンドは，延々と同じところを回る，つまり「逸脱」を許さないことで，そういう「監視」の象徴のようでもある。ところで，こういうメリーゴーラウンドなどの「逸脱」を許さない

範囲内での憂さ晴らしの効用を，クレインは皮肉っぽく，1894 年 10 月 14 日付ニューヨーク・プレス紙掲載の「コニー・アイランドの落日」（“Coney Island’s Failing Days”）で，コニー・アイランドのメリーゴーラウンドを指して語っている。つまり，「人はメリーゴーラウンドなどで束の間遊べば良いのだ。長きにわたっての憂さ晴らしになる。」「反抗して自殺するなどしないように，時折慰みを与えてやった」のだ。そういう風に仕向ける「この残虐な世界の意図は明らかである」と。所詮娯楽・気晴らしは労働のため，子供に言いかえれば恐らく親の意に染まない恋愛などしないように，あるいはメリーゴーラウンドで遊ばせてやるから，ちゃんと良い子でいるように，という理屈であろう。

リジーとフランクの駆け落ちは，そういう延々と繰り返す日常性からの脱出に見える。スティムスンは当然許さない。だから彼も対抗して銃という非日常的道具をもって，二人を追いかける。とはいえ，所詮彼の馬車の老馬と，二人の若馬とではペースが違う。「若者のペース」には勝てないのである。

思い直してみると，メリーゴーラウンドには別のイメージもある。メリーゴーラウンドに乗って無邪気にはしゃぐ子供たち，親たちの心配そうな「気をつけなさい」という叫びは，親子の思惑の違いを象徴するとも思える。子供たちは，親の言うことをいつまでも聞くだろうか。そういえば，クレインの中編『ジョージの母』（*George’s Mother*：1896）は，親子の断絶がテーマであった。息子はアルコール中毒の無職・町の不良に落ちぶれたが，それでも母は息子を溺愛しながら死ぬ。一瞬，息子は後悔する。しかしたちまち彼は中断していた喧嘩の続きに思いを巡らす。その外には，別の一家の様子が描かれる。即ち叱責する母，多分言うことを聞かない子供。「若者のペース」に話を戻すと，メリーゴーラウンドのように，延々と同じなのは，親子の断絶かもしれない。それこそが普遍的にも見えてくる。

このように，メリーゴーラウンドには，様々な意味が与えられている。娯楽設備という，リアルでないところでの羽目を外すことは許して，逆に日常の生活では逸脱させない装置としての機能があり，また親子の断絶を象徴する役目もあり，さらにここから派生して，日常の堅苦しさから，それこそ遠心力で振り飛ばして駆け落ちまで支援する，先のものとは真逆の機能もあるように見え

る。あるいはもっと単純化して，作品の最初で，スティムスンが自慢げに見ていたことでも分かるように，メリーゴーラウンドこそが，親世代が成し遂げたものの象徴で，文字通り，子供世代はそこから逃げ出すようにも見える[11)]。

男女の駆け落ちとはありふれたパタンであろうが，ここではリジーとフランク二人がリアルに描かれていると評価されている[12)]。そのリアルさは，通常とは一味違う二つのリアルさによって支えられている。つまりリゾート地の観光客ではなくそこで働く人間に焦点をあてたこと[13)]，そして二人の交流が会話ではなく主に目と目を通じてであるということだ[14)]。クレインは一般に男女の会話描写が下手だと言われた。ここでは「目にものを言わせることで」，結果的に彼の作品では唯一，男女の恋愛を上手く描いた作品とも考えられている[15)]。

とはいえ，駆け落ちにも日常性，言いかえれば段取りが必要であろう。その段取りを整えてくれた，リジーの友人ジェニーこそ，あるいは普遍的な人物像——「夢多いが地味で，いつも置いてきぼりにされる」[16)]——かもしれない。誰でも覚えがあるだろう。同性の二人がいつも一緒にいる。二人のうちの一人に恋する異性からすると，いつも二人なので一人は邪魔にしか思えない。お目当ての子は魅力的だが，片方は地味に見える。だが後者が，作品にあるように，恋の仲介役，言いかえれば脇役に徹する役回りを果たしてくれる。フランクはジェニーに感謝の気持ちを持っているが，本文にもある通り，そこには「優越感」もある。所詮報われないジェニーであるし，恋の華も咲き誇るリゾート地であるからこそ，余計惨めに思える。

クレインの伝記を精査しても，このジェニーに該当する人物は，アズベリー・パーク時代には見当たらない。この頃，母親は反発の対象でしかなかった。全くの推測であり，こういう論及をした論文は，私の知る限りないが，このリジーは，時期は少しずれるが，クレインの姉アグネスの投影のようにも見える。彼にとって，姉は禁酒運動にかまける多忙な母の代わりであった。彼を文学的方面に導いた一人は彼女であろう。いかにもロマンティックな小説も書いていた，夢多き女性であったようだ。教師などをしていたが，適性に悩み，人生を無駄にしているという気持ちを持ったまま，奇しくもクレインと同じく28歳で死んだ。そういえば，「若者のペース」のジェニーと同じく，アグネス

は容姿に自信がなかった。ここまで書くと支障があるのかもしれないが，彼女の写真が残っている。クレインが恋焦がれたリリーと比べて，率直に言って凄く地味かもしれない。ともかく，「若者のペース」の二人がジェニーによって新たな人生のスタートを切れたように，クレインにとっても，間違いなく姉が作家生活のスタートを切る，少なくとも一助となったのは疑いない[17]。「若者のペース」は，駆け落ちという日常からの脱出，魅力的な二人の恋人の眩しい行動と共に，それを支える影の存在・日常性があることを教えてくれる，華やかでかつ現実主義的な作品に見える。

3 「仰向けの顔」

「仰向けの顔」は，1900 年 3 月にイギリスのアインスリーズ・マガジン誌に掲載された。前年の年末にクレインは喀血し，6 月 5 日に死去する。つまり作品は死ぬ間際に出版されたが，内容自体も生者にとっての死の恐怖という，彼にとって結果的には差し迫った問題を扱っている。この作品は「スピッツベルゲン物語」（“The Spitzbergen Tales”）という 5 連作の一つである（4 作が完成。1 作は未完）。従来，クレインは戦争を描く時には，南北戦争や，実際に自分が体験したギリシャ・トルコ紛争，米西戦争という実在の戦争を題材にしてきた。ところが「スピッツベルゲン物語」では，架空の王国スピッツベルゲン対ロスティナの戦いを舞台にし，前者の歩兵隊の活動を描いている（ただしスピッツベルゲンという名前は，北極海のノルウェー領の島にある）。あえてクレインが架空の場所を選んだのは，社会背景などにとらわれず，戦ういずれの国に大義があるかなど関係なく，純粋に戦争の不条理，そして（戦）死の恐怖を描こうとしたからと言われる。連作は，クレインのイギリスでの二つの館，つまりレイヴンズブルックとブリード・プレイスで 1899 年当初から書かれ始め，この「仰向けの顔」は 11 月初旬までに完成した。前述の通り，この時点ではクレインは喀血していない。が，実は前年 1898 年 7 月にキューバから一旦アメリカに帰国した折，彼は体調不良を感じたのか，ニューヨーク州のサナトリウム診療所で診察を受けて，結核だと告げられている。死を予期していたとしても不思議

ではない。

ともかく，「スピッツベルゲン物語」の中で高い評価を受け，論じられることが多いのは，「仰向けの顔」だけである。クレイン自身，出来栄えに自信があったのは完成直後の手紙でも分かる（1899 年 11 月 4 日付の手紙）。彼は当時の代表的舞台俳優であった，サー・ジョンストン・フォーブス＝ロバートスンに舞台化を促すために原稿を送っている。なるほど，一幕ものの舞台には格好の作品に見えるが，実を結ばなかった。

拙訳で分かるように，「オールド・ビル」と呼ばれる士官の埋葬を，連作でおおむね主役であったスピッツベルゲン軍のリーン中尉に加えて副官，それに二人の兵士が執り行うという，それだけの話である。一説では，クレインが従軍記者として赴いた米西戦争時代にアメリカ軍の上陸後キャンプ・マッカーラで目撃した，海軍軍医のジョン・ブレア・ギブスの戦死（1898 年 6 月 12 日）と，その埋葬に立ち会ったことが背景と言われる[18]。一方では，そういう具体性を離れて，「埋葬」という儀式を言わば儀式そのものとして扱う例は，大人向けの少年もの連作『ホワイロンヴィル物語』（*Whilomville Stories*：1899−1900）の「ホーマー・フェルプスの裁判，処刑，そして埋葬」（“The Trial, Execution, and Burial of Homer Phelps：1900）にも見られる。執筆時期も近く（1899 年 9 月頃），「仰向けの顔」は埋葬を巡る「大人版」とも言える。

埋葬の儀式が中心であると述べたが，現実的には，いかにその埋葬をうまく出来ないかという話といった方が正確かもしれない。「さて，どうしたものか」という冒頭の書き出しで分かるように，リーンと副官は，遺体の「処理」に困っている。それで，ともかく「埋葬しろ」ということになる。埋葬に動員された兵士たちも，自分の身の安全が大事で，埋葬そのものはどうでもよさそうである。型通りに埋葬の祈りをリーンと副官は唱えるが，実はこれは海難事故で亡くなった者への祈りであり[19]，これが儀式の不様さ・場違いさを露呈している。究極の場違いは，「突然副官がかすれ声で不気味な笑いをたてた」という異様な笑いであろう。まさしく，「その恐ろしい笑いは，神経がかき乱されて心が狂ったようであった。」笑う場ではないはずなのに，笑ってしまう。これはクレインの代表的短編（というか 19 世紀アメリカの代表的短編の一つ）である

「オープン・ボート」（“The Open Boat”：1897）で，遭難して危機に瀕した登場人物が，「おまえの好きな（食べ物の）パイは何？」と唐突に聞いて，聞かれた相手を呆れさせ，当惑させるのに似ている。

つまり，人は究極に追い詰められ，精神が混乱・錯乱すると，まともな反応が出来なくなるのである。実際戦争で錯乱したあげく発狂にまで至り，それが皮肉にも相手を驚かせて戦いをやめさせるという悲喜劇を，クレインは米西戦争を舞台に「軍曹の部下の狂気」（“The Sergeant’s Private Madhouse”：1899）という作品で描いていた。

「仰向けの顔」で，リーン中尉たちはなぜ追い詰められたのか。それは戦友の死体の青白い表情とその宙を見る視線が，死という現実を立ち会う者たちに否応なく押しつけてくるからである。出来るだけ関わりがないようにというのか，生者は死者に恐る恐る触れ，お座なりに土をかける。シャベルの土を入れるたびに死体に当たって，場違いで，感情が何もこもっていないような無機的な音を立てる。単に「バサっ」という音を[20]。この「バサっ」という無機性こそ，T・S・エリオットが提唱した客観的相関物に近い，作品の意味を集約する，つまり死という厳然たる，かつ不毛なリアリティを示す，逆説的に雄弁な「言葉」だという指摘もある[21]。

死の究極性，死体という「もの」になる事実が，兵士たちに嫌というほど突きつけられるのである。矛盾していて，「もの」であるのに，それを越えた恐怖を死体が語りかけてくる。そういう死体と距離を置きたい気持ちのあまり，リーンたちは精神的バランスを崩しそうになる。戦争に対し，張り詰めたものが崩れた時の恐ろしさである。戦死という不条理に対して，何とか「埋葬」という儀式で意味づけようとするが，それが虚しい。

「仰向け」の顔という状況はクレインの作品に度々登場する。ニューヨーク・マンハッタンを舞台とする「男が倒れて，人が集まる」（“When Man Falls, a Crowd Gathers”：1894）でも，てんかんの発作で倒れた男の表情に死の予兆を読み込んで，見物人は釘付けになる。「怪物」（“The Monster”：1898）のヘンリー・ジョンスンの仰向けの顔には溶けた薬剤が降りかかる。「死と子供」（“Death and the Child”：1898）のペザも死体の剝き出しの顔（「自分を見ているような」）に否応

なく引き寄せられる。こういう共通性に着目して，「仰向けの顔」の死体の顔を白紙の用紙，キャンバスになぞらえ，クレインの創作行為（の苦悩）を重ね合わせるマイケル・フリードの批評は難解であり，牽強付会の典型とも言われるが，一方で新解釈として，この短編の知名度を高めたのは確かである[22)]。

この批評の当否はともかく，繰り返せば死んだ士官の顔が，死を体現していて，その仰向けの視線が，見る者に死という事実，結局人間は土に還るという現実を突きつけ，捉えて離さないのである。そして生者はそれを何とか受け入れないように必死になって，ともすれば滑稽にもなる。その点でブラック・ユーモアめいたものが付きまとう。戦いで任務を果たすには，死を恐れずに，というかそのことは一応考えないで，戦うしかないであろう。しかし死んだ顔，それが見つめてくるような事態を前にして，ひたすらたじろいでしまうのである。混乱のあまりリーンが副官のためらいをなじる叫び，いや悲鳴に近い声は，現実・外界に対する感情的反応が印象主義であり，それを越えて，言いかえれば現実とはあまり関係のない内面の言わば激発的反応となっているとするなら，これこそ表現主義的とも解されている[23)]。僅か英文で 1500 字ほどの作品は，反対に言うと無駄なく，死と対峙した生者の精神的混乱を的確に伝えている。

4　結び

クレインは 1900 年 6 月 5 日に死去し，その後，シャーロック・ホームズが住んだとされるロンドンのベーカー・ストリート 221B 番地の反対側の通りにある，82 番地の建物で，遺体が 1 週間ほど公開された。彼の死に関する詳細は，内妻コーラの混乱したメモしかなく不明だが，その時，彼の目は開いたままで虚空を見つめていたのだろうか。そうでなくても，見に来た旧友たちに，死の実相を伝えていたのであろうか。『赤い武勲章』の新聞掲載版を一挙にニューヨーク・プレス紙に 1894 年 12 月 9 日に掲載し，クレインの文壇デビューを後押ししたカーティス・ブラウンは，遺体を見て「クレインは非常に苦しんだようだった」とだけ言っている[24)]。

クレインの作家生活は見た通り非常に短く，ここで論じた二つの作品の執筆時期は，僅か 6−7 年しか開いていない。駆け落ちという青春の希望に溢れた地点から，死という事実を目前にしてうろたえる兵士の絶望感まで，クレインは一気に描いて駆け抜けていった。彼の場合，「若者のペース」で芽生えた鮮やかな色彩表現は，「仰向けの顔」ではすっかり影を潜めた。華やかな「赤，スミレ，緑」という「若者の未来」を彩る色は，死体の「青ざめた」，そして土気色に変わっていく。クレインが現実に目覚め，もっと着実で地味な表現に戻ったのだとも思えるし，一方では，独自の印象主義的才気をなくしたのだとも言えよう。共通するのは，両作とも「銃」が登場することである。クレインは，人生は戦いだと語っていた。「若者のペース」では，銃を持って追いかけてくる老人から軽やかに逃亡していく若さの戦いを描いたのであり，一方「仰向けの顔」では銃の対象になること，その結末（即ち死）から戦場で物理的にも，精神的にも逃げられそうになかった。実際，連作「スピッツベルゲン物語」の最後は，凄惨かつ無意味な戦死を描く「神が望むなら，死を覚悟せねば」（“And If He Wills, We Must Die”：1900）であった。いや，そもそも「若者のペース」でさえ，実は男女二人の「無邪気さ」・「危うさ」にはクレインのアイロニカルな視点が及んでいて，決して彼らの将来は希望に満ち溢れたものではなく，単に「希望という幻想」を描いたのだという意見もある[25)]。クレインはこの作品を描いた当時から，一方では極めて皮肉屋の面を新聞記事では見せていた。その点では，不気味なブラック・ユーモアを示す「仰向けの顔」まで一貫していたとも言えるかもしれない。

言うまでもなく，作家の最初と終わりには差異も共通性も，進歩も退歩も見られる，ということであろう。本稿では，クレインとは大違いで，この慶應義塾大学法学部だけでも 39 年もお世話になった論者が，退職という締めくくりにあたって，彼の最初と最後の佳作短編を紹介した次第である。

5 「若者のペース」（訳）

I

スティムスンは角に立って，睨みつけていた。小柄だが，険しい表情の持ち主で，いかめしい頬髭をたくわえていた。

「あのうすのろの若造」と，彼はつぶやいた。「リジーに目配せするのをやめさせないと。いい気になりやがって。何としても，クビにしてやる。」

怒って額に皺を寄せながら，彼は大股で出口に向かい，看板を見上げた。「当地随一のスティムスン・メリーゴーラウンド」とある。堂々としたものだった。しばらくじっと見ていた。立派な看板だ。文字は人の背丈ほどもある。その輝き，威厳は疑いようもない。そう満足しながらも，心に決めたように首を重々しく振った。「いやダメだ。いい気になりやがって。何としても，クビにしてやる」と，またつぶやいた。

波の静かなざわめきに混じって，海水浴客の叫び声が海辺から聞こえてきた。砂浜と空と海の眺めが遠く北の方で一つに溶け込んでいた。赤い水着の女性が水面をクモのようにゆっくりと泳いでいる。脱衣所がぎっしりと集まっていて，旗が何本かたなびいている。水平線には一隻の帆船が空にぼんやりと帆を浮かべ，はるか上の静かなまぶしい空には，一羽の大きなタカがゆったりと弧を描いていた。

メリーゴーラウンドでは，木製のライオンやキリン，ラクダ，子馬，ヤギが回っていた。けばけばしい色の胴体と金具は，ずっと上の窓から差し込む強烈な陽射しにギラギラ光っていた。大きな自動オルガンが速いテンポでけたたましく音楽を鳴らす中，硬い木の脚の動物たちが果てしなく回っている。動物たちに合わせて動くザクロ色の天井に，太陽が金色の光をまき散らし，その光がスティムスンのメリーゴーラウンドの装飾をすべて素晴らしく豪華に見せていた。たくさんの子供が，木製の動物にまたがり，突撃する騎兵隊のように前かがみになって手綱を操りながら，歓声を挙げていた。一本の長い腕木が突き出ていて，鉄の輪が掛けてある。子供たちはそれをつかもうと，時に思い切って身を乗り出す。素早く輪を握ろうとして，興奮のあまり小さな身体が緊張で震

える。笑い声が鋭く響いて場内が活気づく。周りの長いベンチに親が大勢座ってメリーゴーラウンドを見ている。時々父親が立ち上がって近づいてくる。ぐるぐる回る子供たちに声援を送り，危ないと声をかけ，拍手をする。母親が「ジョージ，気をつけて！」と叫ぶ。台の上の自動オルガンが大音量でがなり立て，長たらしい単調な曲で耳を圧する。反対側の角のカウンターの後ろから，白いエプロンをした男が騒音に負けないように「ポップコーンはいかが。ポップコーンは」と叫んでいる。

若者が高く小さな台の上で，説教壇にいるように背を伸ばし，子供たちが回るぎりぎりに立っている。腕木を回し，鉄輪を扱うのが仕事だ。子供たちが全部取り終えて自慢している中，彼はバスケットを差し出して，子供たちのお目当てである真鍮の鉄輪を除いて回収する。真鍮の鉄輪を取った子供は，誇らしくももう一回無料で乗れる。若者は一日中狭い台に立って，輪を回収してはまた入れる。子供たちからすれば偉い人だが，若者にすれば忙しいだけの話だ。

スティムスンは目ざとく，若者が時々台の上で身をよじって，銀色の金網のボックスの後ろで恥ずかしそうに切符を売っている娘を見ているのに気づいていた。これが正にスティムスンの不機嫌な理由であった。台の上にいる若造が，銀色の金網の後ろの娘に微笑みかける道理などない。思い上がるのもいい加減にしろ。スティムスンはその光景に呆れかえった。「何と。あの野郎，うちの娘に色目をつかいやがって。」激しく怒って独り言を漏らしてはいたが，一方では，畏れ多くも父親の前で娘に微笑みかけるなど，どういう神経だろうと不思議がっている節もあった。

銀網越しに黒い瞳の娘が見える。若者が眺めているのに気づくと，決まってすぐに顔をそらし，興味がないといった表情をする。だが時には，危なっかしい台から若者が落ちないかと，瞳に優しい気遣いを，娘は浮かべるようでもある。こういう表情をされると，若者にすれば非常に励まされた。そして台から落っこちようが構うものかと大胆に立ってみせる。毎日の仕事に取紛れながらも，金網の後ろの娘をしきりに見ていたのである。

この密かな求愛は，華やかなメリーゴーラウンドに集まった大勢の客たちの頭越しに交わされていた。若者の短い，だが雄弁な視線が，思いを込めて誰に

も悟られずに静かに送られていた。こうしてついに二人の間には，暗黙の了解と二人だけの意識が成立した。どんなことでもすべて正確に伝えあった。若者は彼女への愛情と敬意，そして将来の夢を語った。娘の方は，愛しているとも愛していないとも，自分の気持ちが分からないとも，また再び愛するとも言った。時には銀網の上に金文字で「売り場」と書かれた小さな掲示が，愛の言葉を妨げることもあった。

二人の愛には嫉妬や不安，絶望などもつきまとった。妹のために切符を買いに来た若い男に，娘は華やかに微笑んだことがあった。すると台上からこれを見ていた若者は，陰鬱な怒りの気持ちに駆られた。復讐の神のように台座に立ちつくし，子供たちにバスケットを素っ気なく差し出した。その虚しい楽しみ，頼りない束の間の喜びをいかにも軽蔑するかのように。五時間ほどの間，彼女が自分を見ても無視した。素っ気なくしてがっかりさせてやる。一度だって本気じゃなかったと思い知らせてやる。しかしこっそりと彼女を見ると，いつもより幸せそうだった。自分がいかにも無視したのに，彼女は落胆していない。そう思うと非常に苦しんだ。自分のことなど愛していない，と彼は結論づけた。愛しているなら，彼女は失望するはずだ。二日の間，若者はずっと台の上で惨めであった。不幸を嘆き，彼女を時にちらと見ることで，せめて自分を慰めた。ともかく彼は彼女と一緒にここにいるのだ。「売り場」の文字が邪魔しない限り，この台上から彼女がよく見える。

突然あっという間に二人の間の暗雲が吹き払われ，元通りの晴れ晴れとした青空が蘇り，平和が訪れた。不安のない平和，赤ん坊のように危うくとも将来を無邪気に信じる平安が。だがこの自信も次の日までは続かない。突然理由もなく彼女は彼を見なくなった。若者は仕事を続けたが，呆然とした頭が疑問や恐怖，不安に苛まれた。視線で必死に説明を求めるが，冷たい視線が返ってきて血も凍る思いであった。怒る理由が二人では大いに違っていた。若者の怒りは他愛もなく月光のように率直であったが，彼女の場合は微妙で女性らしく不可解で，夜の闇のように神秘的であった。

二人の仲は波乱の連続であったが，ついには一緒にいないと砂漠をさまよう虚しさに等しいと知るようになった。二人は自分たちのあやふやさ，動揺，互

いの気持ちの推測に没頭するあまり，現実の世間など実体のない背景のようになってしまった。平和な時には，二人の間は祈るように優しく，距離に託した愛撫に似ていた。だが戦時には，若いからこそ非常に苦しみ，錯綜した疑念に掻きむしられた。愛するがゆえの猜疑という恐ろしい天使に因われ，心が果てしなく，行き場のないところに押しやられた。

夜になると，彼女が自分を愛しているかどうかという疑惑が，若者の前に丘のように立ちはだかり，騙されるなと語りかける。翌日には，前夜の苦しみのため，それだけ彼女への視線も強くなり回数も増す。彼女も悩んでいるのだ。そう思えるといつも喜びでぞくぞくする。

しかしこういう心の猜疑は所詮くだらないのだと思い知る時が来た。若者は現実の苦しみがいつか来ると，予期していた気がした。あの恐るべきスティムスンが介入してきたのだ。

「やめさせないと」と二人を見ながらスティムスンはつぶやいた。二人はすでに周囲の雑音など気にしなくなっていた。お互いへの思いに没頭するあまり，その視線は態度に表れているのも同然と言えるほど露骨になっていた。スティムスンは，その鋭い，並外れた過ちのない観察眼で，この明らかな事実を把握した。「全く，図々しくも」と，改めて台上の若者を睨んだ。

彼は断固とした男であった。危ういことに取り組むのにも躊躇いなどなかった。すべてを一瞬でひっくり返してやると心に決めた。小柄だが性格は激しく容赦なかった。二人の戯言などぶっ潰してやる。

銀網に大股で近づいて，彼は言った。「あの馬鹿者にいつも色目をつかうのは，今すぐやめろ」と厳しく命令した。

娘は目を伏せ，もじもじするばかりであった。体は小さくても恐ろしい父親の鋭い見透かしに，耐えられなかった。

スティムスンは娘のもとから，台上に向かった。若者を睨みつけて言った。「今，リジーにも伝えたが。お前の方は仕事だけをしていろ。さもないと来週にはクビにしてやる。」その言葉は銃弾さながらに発せられた。若者は，台上で目眩いがした。やっとのことでどうにか落ち着きを取り戻し，何とかどもりがちに答えた。「は，はい。分かりました。」恐ろしいスティムスンを相手に，

逆らっても虚しいのは知っていた。バスケットの中の鉄輪をがらがらいわせ，それを数えるか調べないといけないような素振りをした。娘と同じく，偉大なスティムスンには面と向かえなかった。

差し当たってスティムスンは非常に満足し，自分の脅しの効果ににんまりとしていた。「これで良い」と満足げに言って，葉巻をくわえながら考えていた。自分の癇に触った奴はいつでもすぐに黙らせてやれると，誇らしく思って。

II

自分の癇に触った奴はいつでもすぐに黙らせてやれると，スティムスンが誇らしく思いに耽っていた一週間後の晩，銀網の後ろの娘の女友だちが，娘のところにやって来て，「スティムスンの大メリーゴーラウンド」が営業を終わった夜，海岸を散歩しようと誘った。娘はうなずいて同意した。

鉄輪を握って台上にいた若者は，このうなずきを見てその意味を理解した。心には，あの恐ろしいスティムスンの監視を出し抜く策が浮かんでいた。

メリーゴーラウンドが営業を終え，娘と女友だちは海岸に向かった。若者は別の方向にぶらぶら向かったが，二人から目を離さなかった。と，スティムスンの目を逃れたと分かった瞬間，後を追った。

海辺の明かりが，きらきらと海岸に沿って広がっていた。広い遊歩道には大勢の人々が混じり合うように，溶け合うように，時にはぶつかるように散策していた。暗闇に広大な紫の海がある。濃い藍色の空には満天の黄色い星。岸辺で泡が渦巻き突然光を放つ時がある。まるで大きな幽霊の衣が姿を現したみたいに。そして消えて海は漆黒に戻る。名状し難い気持ちを込めた，海の低いうねりが聞こえてくる。波の残滓を思わせる冷たい風のせいで，散策する女性たちは喉のところまで襟を閉め，男たちは麦わら帽のへりをつかんでいた。風が急に大テントで演奏する楽団の音を運んでくる。音楽をよく聞き取れない散策客は，遠く大テントの方を見て，指揮者が身振りを交えて動き回り，楽団員が楽器に唇をつけているのを確認する。空高くには月が控えめに，かすかな銀色に輝いている。

しばらくの間，若者は怖くて二人に近づけなかった。距離を置いてつけてい

る自分を臆病だと罵った。だが彼は，ようやく二人が大勢の散策客から外れて，静かに海の音を聞いているのを目にした。二人に近づくと，興奮で身震いした。二人は自分を見ていなかった。

「リジー」と彼は言った。「僕は。」

娘はすぐに振り返り，喉元に手をやった。「まあ，フランク。驚いた」と彼女は言った。他に言いようもなく。

「あの。僕は，その」と彼は口ごもった。

連れの女は生まれつき，こういうことに立ち会う類の女性であった。彼女は愛に敬意と憧れを抱いていた。自分に恋愛の経験がないと自覚していたからこそ，余計にそうであった。恋愛に燃えるこの二人に彼女は心を打たれた。二人の何か役に立てればと謙虚に願っていた。彼女は容貌に恵まれていなかった。

若者が二人の前で口ごもると，彼女は非常に同情し，この状況を深刻に受け取るあまり，若者が二人の足元で倒れるのではと思った。恥ずかしくはあったが，勇気を奮って，彼女は救いの手を差し伸べた。「一緒に海岸を散歩しませんか？」若者は彼女に非常に感謝する目をした。だがその目には，愛する者が，共感してくれる第三者に抱きがちな，優越感のようなものも見て取れた。三人は歩き続けた。

こういう状況に出会う運命に生まれついた女が，自分は座って一人で海を眺めていたいと言い出した。若者は生涯この女の友人であろうと誓った。

それで二人は彼女抜きで歩き続けた。一度振り向いて彼女を見た。

「ジェニーは本当に親切なの」と彼女は言った。

「本当にそうだよね」と彼は同意した。

しばらく無言であった。

ようやく娘が話した。「昨日，怒っていたでしょう？」

「そんなことない。」

「いいえ。そうよ。一度だって私を見なかった。」

「怒ってないよ。ただそういう振りをしただけだよ。」

もちろん彼女は知っていたが，こう言われると，かえって怒りの気持ちが湧いた。ちらっとすねたように彼を見つめて，言った。「そう，そうだったの」

と素っ気なく。

しばらく彼女の勢いがよく，それに押されて彼は必死に愛していると訴えた。口からついて出てくる愛の言葉は，哀れにも途切れ途切れであった。

二人が例の女性のところに戻ってくると，彼女はじっと待っていた。彼女への優越感とともに，二人は優しい気持ちでいっぱいになった。

二人はこの上なく幸せだった。もし不幸ならば，このロマンティックな夜の光景も殺風景に見えただろう。しかし二人は幸福だった。何となく，どうして紫の海や黄色い星，灯りの下の行き交う群衆が無表情で無感動なのだろうと思っていた。

二人は湖のそばを通って帰った。湖面には華やかなランタンが瞬き，揺れて動き，赤，スミレ，緑と金が色とりどりに，二人に未来という不思議なものを歌いかけてきた。

蒸し暑くて冴えない午後のせいで客が少なく，スティムスンは町に出かけた。戻ってくると，角のスタンドのポップコーンの売り子が無人の切符売り場をじっと見ていた。それに，腕木と鉄輪の係もいない。

スティムスンは近衛曹長のようにつかつかと歩み寄った。「一体リジーはどこだ？」と目に怒りを浮かべて聞いた。

ポップコーン売りはスティムスンの下で長く働いていたが，その脅しに慣れることが決してなかった。それまで気絶でもしていたかのように，やっとのことで「二人は，あの，家に行ったみたいで」としどろもどろに答えた。

「誰の家だと？」とスティムスンは詰問した。

「あ，あなたの家かと」とポップコーン売りは言った。

スティムスンは家に向かった。恐ろしい怒りの言葉をすでに思いついていて，今にも口に出しそうであった。あのガキども二人に浴びせかける時を待ちかねていた。

家では妻がしゃくりあげながら涙を流していた。

「リジーはどこだ？」

すると妻はまくしたてた。「大変なの，ジョン。駆け落ちしたの。きっとそ

うだと。たった今，ここを馬車で通り過ぎたわ。私にお別れを言うつもりでそうしたのかと。リジーは悲しそうに手を振っていて。どこに行くのか尋ねようとしたら，フランクがムチを振るって。」

スティムスンは恐ろしい声で吼えた。「銃を持って来い。馬車も呼べ。銃だ。聞いているのか。何，何ということか。」次第に彼の言葉はよく分からなくなった。

常日頃，彼は歩兵にするように妻に対して命令口調であった。悲しみに打ちのめされていたが，長年の習慣で，彼女は立ち上がって従おうとした。が，振り向いて夫に金切り声で取りすがった。

「ジョン，だめよ。銃だけは」

「馬鹿。放せ」と彼は怒鳴って妻を振りほどいた。

彼は帽子もかぶらず通りに出た。夏のリゾートには大勢の貸し馬車があるが，一台探すのに相当時間がかかった。と，彼は見つけると牡牛のように飛びかかった。「町だ」と彼は叫び，転がり込んで後部座席に乗った。御者は重病人かと思った。多くの住民が，この小柄な無帽の男によって何の騒ぎが引き起こされたのか見ようと駆け寄ってきたが，馬は疾走してどんどん離れていった。

湖のそばを馬車が跳びはねて走っていくと，たまたまスティムスンには静かな灰色の水面の向こうに，色のついた帽子と頭が見えた。ソリントンに行く街道をもう一台の馬車は進んでいた。スティムスンは怒鳴った。「あそこ，あそこだ，あの馬車だ。」

御者は状況がよく分かって張り切った。彼は気負ってムチを入れた。その口元は興奮でニヤついていた。おんぼろ馬車，元気のない馬，それまで眠そうに目をしょぼつかせていた御者は突然目覚め，活気づいて走り出した。馬は自分の脚力を心配するのをやめ，物思いに耽るような様子が消え去った。老いた脚で全力を奮い，スピードを上げておかしくも不格好に駆けた。御者は目を輝かせ，席からじっと，派手な音を立てて前方を走る馬車の動きを見逃さなかった。火夫が石炭や石油をくべるように，慎重に自分の馬の様子を見ながらムチを入れた。馬のヒヅメが舗石に音を立て，車輪は唸り，車体はきしんだ。

後部のスティムスンは，内心煮えくり返る思いでも，他人に戦いを委ねざるを得ない人間がよくそうするように，無表情で座っていた。しかし時々心の怒りが顔に現れて，喚いた。「行け，行け。近づいているぞ。ぶっつけろ。ひき殺せ。ぶっつけろ。馬鹿者。」馬車の幌を支える軸をしっかり握っていた。強くつかむあまり，釘が緩みそうであった。

前方で，例の馬車が，背後の脅威に気づいたようにスピードを上げて走っていた。滑らかに疾走して去っていく。若く元気な馬に血気盛んに引っ張られて。スティムスンには前の馬車の幌が激しく上下するのが見えた。後ろの小さな窓が目みたいに，自分を嘲笑っているようだ。一度身を乗り出し怒りの言葉をぶちまけた。が，無力さを感じ始めた。自分のこの行いはそっくりそのまま，飛ぶ鳥の後をよぼよぼと追っかける老人みたいだ。老いという感覚が，怒りとともに自分を締めつけた。もう一方の馬車は，若者で，若者のペースで，夢という希望を持って駆けている。自分は前の二人の子供に追いつけないと悟り始めた。すると，突然奇妙にも畏れを感じた。なぜなら，二人の若い血潮の力を理解したから。自分の屍が地上で埋葬される時でさえ，未来へと力強く飛んでいき，何度でも情熱と希望を抱ける力を。

灼熱の道は埃っぽく，スティムスンの鼻腔を塞いだ。街道ははるか遠くで消えていて，途方もない距離を思わせる。前方の馬車は非常に小さくなって，もうあの嘲るような窓も見えなくなった。

ようやく御者が手綱を引いてスティムスンの方を振り向いた。「無駄ではないかと」と彼は言った。スティムスンは怒り，絶望したが，事実を受け止めた。馬が汗を滴らせているのを御者が見た時，スティムスンは驚いたようだが観念して席に深々と座り直した。まるで世界に拒まれたみたいに。自分もひどく汗をかいていて，ハゲ頭が冷たく不快に感じた。手を頭にやって，初めて帽子を忘れたことを思い出した。

彼は肩をすくめてみせた。それは，ともかく自分に責任はないという意味であった。

6 「仰向けの顔」（訳）

I

「さて，どうしたものか」と，副官が困ったように不安そうに聞いた。

「埋葬するしかないかと」とティモシー・リーンが言った。

二人は，足元に横たわる仲間の遺体を見下ろした。遺体の顔はチョークみたいに青白い。ただ，目は開いたまま空を凝視している。立っている二人の頭上を銃弾が音を立てて通り過ぎる。丘の上では，リーンが属するスピッツベルゲン歩兵隊が腹ばいになって，狙いを定めて応戦している。

「今はそうしなくても」と副官が聞いた。「明日まで待った方が。」

「いや」とリーンが答えた。「この陣地では一時間も持ちこたえられません。いずれ撤退することになります。だからビルは，今埋葬しないと。」

「そうか」と副官はすぐに同意した。「兵士たちが，埋葬する用具を持っていたな。」

リーンは，戦闘中の前線の兵士に大声で命令した。と，二人の兵士がツルハシとシャベルを持って来た。彼らは敵陣のロスティナ軍の狙撃兵の方をじっと見ている。耳元を弾丸がかすめた。「ここを掘れ」とリーンが素っ気なく命じた。部下たちは視線を地面に向けねばならず，怯えたようにあわてて作業をした。弾丸の来る方向が分からなくなるのだ。地面を掘るツルハシの鈍い音と，銃弾がかすめて弾ける音とが交錯した。やがて兵士の一人がシャベルを使い始めた。

「そうだな」と副官はゆっくりとした口調で言った。「衣服の中を調べて，その，所持品を取り出した方が良さそうだな」と。

リーンはうなずいた。二人とも呆然と遺体を見ていた。と，リーンは，突然はっと気づいたように肩を震わせた。「そうですね。見たほうがいいですね。所持品を」と彼は言って，ひざまずいて遺体に手を伸ばした。しかし上着のボタンのところで手が止まった。第一ボタンは乾いた血でレンガのように赤くなっている。どうにも触れられそうにないのであった。

「早くやった方が」と副官がしわがれ声で言った。

リーンは手をこわばらせたまま伸ばして，指で血染めのボタンをいじくった。真っ青な顔をしてようやく立ち上がった。腕時計，呼子，パイプ，煙草入れ，ハンカチ，カードや紙入れを取り出していた。彼は副官を見た。気まずいまま二人は黙っていた。副官は，リーンにこんな嫌な仕事をやらせて卑怯だったと思っていた。

「さて」とリーンは言った。「これで全部かと。銃剣はお持ちかと。」

「持っている」と副官は，顔を引きつらせて言った。と，突然二人の兵士に不可解にも怒りをぶちまけた。「墓を急いで準備しろ。何をしている。急げ。お前たちみたいなのろまは見たことがない」と。

こう彼が必死に叫んでいる時でさえ，兵士たちにすれば命の方が気がかりであった。ずっと頭上を弾丸が飛びかっていた。

墓掘りが終わった。出来は良くなく，小さくて浅くお粗末であった。リーンと副官は黙っていたが奇妙にも気持ちは通じていた。

突然副官がかすれ声で不気味な笑いをたてた。その恐ろしい笑いは，神経がかき乱されて心が狂ったようであった。「さて」とふざけた口調で彼はリーンに言った。「放り込もう」と。

「そうですね」とリーンは応じた。二人の兵士は用具を杖にして立ったまま待っていた。「どうも，自分たちで埋葬した方が良さそうな」とリーンは言った。

「そうだな」と副官も応じた。と，リーンに遺体の調べをさせたことを明らかに思い出したようで，今度は自ら勇気を奮って遺体の衣服に触れた。リーンも加わった。二人とも，指が遺体そのものに触れないようにしていた。二人で力を入れて，ぐいと遺体を持ちあげ，ぐらつかせながらも墓にどさっと入れた。二人は顔を見合わせた。実際この間，ずっと見合っていたのだ。ほっとため息をついた。

副官が言った。「何かしなくては。何か言わないと。お祈りの言葉を知っているか，ティム？」

「墓に土を入れないと。それまでお祈りはしないものかと」と，リーンは一般的な話を持ち出した。

「そうなのか？」と，副官は間違っているのにショックを受けていた。と，突然，大声で言った。「そうか」と彼は急に言った。「そうか。それにしても遺体が顔を見せている間に，何かお祈りをしてあげよう。」

「そうですね」とリーンは言った。「それなら，何かお祈りの文句をご存知ですか？」

「いや，一行も」と副官は言った。

リーンはその言葉を非常に疑っていた。「私もせいぜい数行かと。」

「なら覚えているだけで良い。知らないよりましだ。それに，敵どもが射程距離に来ているし。」

リーンは部下二人を見た。「気をつけ！」と叫んだ。兵士は即座に敬礼したが，気が気でないようだった。副官はヘルメットを脱いで膝のところに置いた。リーンも帽子を取って墓のそばに立った。敵方のロスティナ軍は盛んに発砲していた。

「父よ，我が友が死という深い海に沈んでいきます。しかしその霊は汝の下へと。沈んで行く者の唇から発せられた泡のように。願えれば，父なる神よ，この小さき泡を見届けたまえ。」

リーンはしわがれ声で恥ずかしく思いながらも，ここまで躊躇いもせずに言い終えた。しかし遺体を見て虚しい思いに駆られ，ここで言いよどんだ。

副官は居心地悪そうな仕草をして，「そして尊き高い御許より」と言ったが，それ以上続かなかった。

「そして尊き高い御許より」とリーンが繰り返した。

副官は突然スピッツベルゲンの合同葬を思い出し，すべて了解したように自信たっぷりに言い始めた。

「神よ，慈悲を。」

「神よ，慈悲を」とリーンも従った。

「慈悲を」と副官は繰り返したが，結局後が続かない。

「慈悲を」とリーンも言った。そこで急に感情が高ぶり，二人の兵士に強い口調で「土を入れろ！」と命令した。

ロスティナ軍の狙撃兵の発砲は正確に，ずっと続いていた。

II

兵士の一人が，気が進まなさそうに，シャベルを持って墓の縁に来た。土を一すくいしたが，一瞬遺体の上で，どういうわけかシャベルの動きが止まった。遺体が青ざめた顔で，墓からじっと見ている。と，兵士はシャベルの土を，遺体の足元に入れた。

リーンからすると，まるで自分の額に土がかけられずにすんだかのような気がした。兵士は恐らく土をかけるだろうと思っていた。遺体の顔に。なのに，足元であった。そこで間を持たせるなんて。足元にかけるとは。何ともうまい！

副官がぶつぶつと言い出した。「その，もちろん，一緒にずっとやってきた仲間だ。だからこそ，そんなことは出来ない。野晒しなんて。だから，埋葬しろ。」

急にシャベルを持った男がガクッとなった。右腕で左腕をかばい，命令を待っている。落とされたシャベルをリーンは拾って「下がれ」と，この負傷した兵士に命じた。もう一人の兵士には，「お前も下がれ。俺が，俺が後はやる」と。

負傷した兵士は，銃弾が飛んでくる方を見ようともせず，あわてて丘の上によじ登っていった。もう一人もほぼ同じ動作だったが，彼はしきりに三度ほど銃弾の方を見た。撃たれるか撃たれないかは，往々にして，単にこういうものだ。

リーンはシャベルに土をすくい，躊躇いながら，もうたまらないという風に，その土を墓に放り投げた。と，音がした。バサっと。リーンはまた土をすくいかけて急に手を止め，額の汗を拭った。疲れたように。

「早まったかも」と副官が言った。その視線は呆けたように定まらなかった。「今，埋葬しなくても。もちろん，明日我が軍が進軍すれば，この遺体は。」

「今さら」とリーンは言った。「黙って下さい！」とても上官への言い方ではなかった。

リーンはもう一度シャベルに土をすくい，墓に放り投げた。その度ごとに音がする。バサっと。しばらくの間彼は，自分が埋められてはたまらないという

かのように，必死に土を入れた。

青白い遺体の顔だけが残った。リーンはシャベルに土をすくったが，「どうして」と副官に叫んだ。「墓に入れる時，どうしてうつぶせにしなかったのですか。これでは。」リーンは口ごもった。

言おうとすることは副官にはよく分かった。唇まで真っ青だった。「ともかく，やってくれ」と，彼は頼むように言った。ほとんど悲鳴に近かった。リーンは勢いをつけるように，スコップを後ろに引いた。それから振り子みたいに前に投げだした。土が墓に落ちた時，音がした。バサっと。

注

1）　たとえば John Berryman, *Stephen Crane*（New York: Sloane, 1950）, p.123 参照。

2）　両作品の翻訳は，“The Pace of Youth”が“*The Open Boat” and Other Stories*（London: Heinemann, 1898）, pp.279−296 に，“The Upturned Face”が *Last Words*（London: Digby, Long & Co., 1902）, pp.52−8 に基づく。また Vol. 5 of *the University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Ed. Fredson Bowers（Charlottesville: University Press of Virginia, 1970）, pp.3−12（“The Pace of Youth”）と，同 Vol. 6（1970）, pp.297−300（“The Upturned Face”）も参考にしている。

3）　この両作には，かつて大久保康雄訳（東京：東西書房 1950）（正確には翻訳集：スティヴン・クレーン［翻訳表記のまま］『巷の娘』［『マギー』のこと］に所載）がある（「若者のペース」が「青春の歩み」という題で pp.153−173,「仰向けの顔」が，「仰向いた顔」という題で pp.199−210）。残念ながら章立ての無視，パラグラフの（多分理由のない）入れ替えや超訳（？）もあり，正確とは言えない。

4）　R. W. Stallman, Introduction to *The Red Badge of Courage*（New York: Modern Library, 1951）, v-xxxiii 参照。こういう形而上的解釈に反対したのが，たとえば，Philip Rahv, “Fiction and the Criticism of Fiction,” *Kenyon Review* 18（1956）, 276−99. なお，「仰向けの顔」についての，このような象徴的・現実的解釈の対立については，後述。

5）　両者の違いについては，Robert A. Morace, “Stephen Crane’s ‘The Merry-Go-Round’: An Earlier Version of ‘The Pace of Youth,’” *Studies in the Novel* 10（1978）, 146−53 参照。

6）　Corwin Knap Linson, *My Stephen Crane*（Syracuse: Syracuse University, 1958）, pp.27−9.

7）　J. C. Levenson, Introduction to the Vol. 6 of *the University of Virginia Edition*, xxxiv.

8）　Paul Sorrentino, *Stephen Crane: A Life of Fire*（Cambridge: Harvard University Press, 2014）, pp.132−4 参照。

9）　Christopher Wilson, “The Pace of Youth: Stephen Crane’s Rhetoric of Amusement,” *Journal*

of American Culture 6（1983）, 31−8 参照。また，この点を広く大衆文化という観点から論じたのが，Bill Brown, *The Material Unconscious: American Amusement, Stephen Crane, and the Economy of Play*（Cambridge: Harvard University Press, 1996）である。特に pp.52−6 の“The Pace of Youth”の項を参照。

10） Linson, p.28.

11） メリーゴーラウンド即ち親世代の所産という解釈については，Donald Vanouse, “Popular Culture in the Writings of Stephen Crane,” *Journal of Popular Culture* 10（1976）, 427−8 参照。

12） G. C. Shellhorn, “Stephen Crane’s ‘The Pace of Youth,’” *Arizona Quarterly* 25（1969）, 334−42 参照。

13） Frank Bergon, *Stephen Crane’s Artistry*（New York: Columbia University Press, 1975）, p. 154 参照。

14） Milne Holton, *Cylinder of Vision: The Fiction of Journalistic Writings of Stephen Crane*（Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1972）, pp.23−4 参照。

15） James B. Colvert, *Stephen Crane*（San Diego: Harcourt Brace Jovanovich, 1984）, p.91 参照。

16） Schellhorn, 339−40.

17） 実際，彼女の作品「誇らしき敗北」（“A Victorious Defeat”: 1883）は，クレインの恋愛ものの中編『第三のスミレ』（*The Third Violet*: 1897）に影響を与えたとも言われる。Donna M. Cambell, “More than a Family Resemblance? Agnes Crane’s ‘A Victorious Defeat’ and Stephen Crane’s *The Third Violet*,” *Stephen Crane Studies* 16: 1（2007）, 14−24 参照。また，アグネスの四つの作品はすべて報われる愛・報われない愛を扱っていることで，「若者のペース」と無関係ではないという漠然とした指摘もある。Thomas A. Gullason, *Stephen Crane’s Literary Family*（Syracuse: Syracuse University Press, 2002）, p.14 参照。

18） Michael W. Schaefer, *A Reader’s Guide to the Short Stories of Stephen Crane*（New York: G. K. Hall & Co., 1996）, p.418.

19） Stallman, *Stephen Crane: A Biography*（New York: George Braziller, 1968）, p. 364 参照。

20） この点を，死というリアリティは言語で表現不能ということに結びつけて「解釈」したのが，Charles Swann, “Stephen Crane and a Problem of Interpretation,” *Literature and History* 7（1981）, 111.

21） James Nagel, *Stephen Crane and Literary Impressionism*（University Park: Pennsylvania State University, 1980）, pp.17−8.

22） Michael Fried, “Realism, Writing, and Disfiguration in Thomas Eakins’s *Gross Clinic*, with a Postscript on Stephen Crane’s Upturned Faces,” *Representations* 9（1985）, 33−104. 特に 89−

95; *Realism, Writing, Disfiguration: On Thomas Eakins and Stephen Crane*（Chicago: University of Chicago Press, 1987）. 特に pp.96−101. フリードが注目しているのは，『赤い武勲章』でヘンリーが出会う死体の顔と「怪物」のヘンリー・ジョンスンの顔，それと「仰向けの顔」の死体との共通性である。批判として代表的なのが，Raymond Carney, "Crane and Eakins," *Partisan Review* 55（1988）, 464−73. このフリードを代表とする，ポストモダン的クレイン解釈への全体的な批判としては，Colvert, "Stephen Crane and Postmodern Criticism," *Stephen Crane Studies* 1（1992）, 2−8.

23）　Bill Christophersen, "Stephen Crane's 'The Upturned Face' as Expressionist Fiction," *Arizona Quarterly* 38（1982）, 147−161; Chester L. Wolford, *Stephen Crane: A Study of the Short Fiction*（Boston: Twayne, 1989）, pp.77−82.

24）　Stanley Wertheim and Paul Sorrentino, *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane 1871−1900*（New York: G. K. Hall & Co., 1993）, p.448.

25）　Holger Kersten, " 'The Pace of Youth' and the Phantoms of Hope," A Special Edition of *War Literature and the Arts*（Colorado: United States Force of Academy, 1999）, pp.172−182 参照。また，この点については，Charles E. Mayer も作品中のパロディックな恋人の描き方を通じて，その行く末に悲観的なものを見ている。Charles E. Mayer, " 'The Pace of Youth' : Prelude to 'The Bride Comes to Yellow Sky,' " *Eureka Studies in Teaching Fiction* 8: 1（2007）, 24 参照。